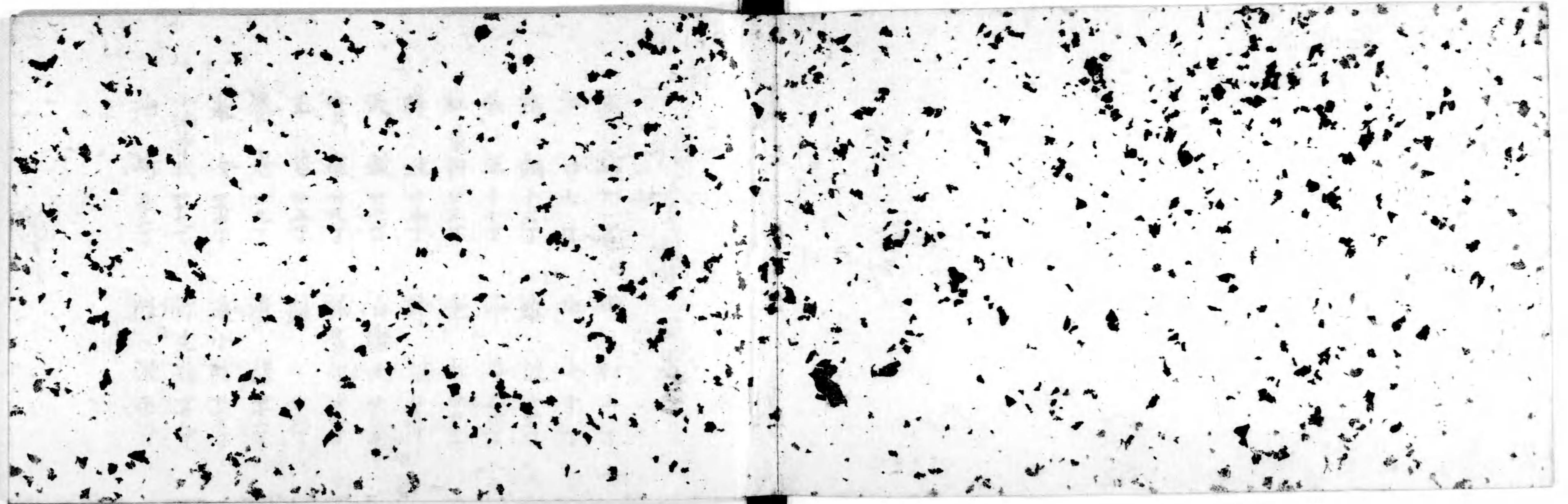


觀女獨吟集



始



特 100
42

獨吟集 目次

高砂一丁	田村三丁
江口七丁	斑女十丁
鷄飼十三丁	難波十六丁
兼平十七丁	千手二十丁
紅葉持廿三丁	老松廿四丁
賴政廿五丁	井筒廿五丁
天鼓廿七丁	白樂天廿八丁
實盛廿九丁	楊貴妃卅三丁
玉萬卅五丁	融卅六丁
養老卅九丁	清經卅一丁
采女卅四丁	通小町卅七丁
小袖當裁卅九丁	竹生鳩卅九丁
柏崎卅五丁	阿漕卅五丁

志賀寺九丁	鷹野寺六丁
大原御幸六丁	梅枝寺四丁
誓願寺六丁	蟻小通寺八丁
忠度寺七十丁	熊野寺三丁
進行柳寺七十丁	藤戸寺九丁
玉井八十丁	景清寺十丁
杜若八十丁	二人靜寺十丁
安達原八十丁	賀茂寺八丁
俊寛寺九十丁	松風寺三丁
西行楊寺九十丁	浮舟寺七丁
吳服寺九十丁	八嶋寺九丁
葛城寺百丁	海士寺三丁
鞍馬天狗寺百丁	咸陽宮百七丁
龍田寺百八丁	隅田川百十丁
雲林院寺百丁	春日龍神寺百三丁

源氏供養寺三丁	花籠寺六丁
富美鼓寺九丁	皇帝寺三丁
櫻川寺三丁	山姥寺三丁
善思寺八丁	芭蕉寺八丁
百萬寺三丁	船弁慶寺三丁
女郎花寺三丁	自然居士寺三丁
三輪寺三丁	安宅寺三丁
東北寺三丁	蟬丸寺三丁
狸女寺三丁	威久寺三丁
善知鳥寺三丁	小塩寺三丁
那野寺三丁	殺生石寺三丁
野宮寺三丁	唐船寺三丁
弓八幡寺三丁	鉢木寺三丁
羽衣寺三丁	芦刈寺三丁
敦盛寺三丁	葵上寺三丁

江野嶋 <small>夏寺</small>	西王母 <small>夏寺</small>
道明寺 <small>夏寺</small>	經改 <small>夏寺</small>
巖 <small>夏寺</small>	巴 <small>夏寺</small>
嵐山 <small>夏寺</small>	卷絹 <small>夏寺</small>
花月 <small>夏寺</small>	鐘 <small>夏寺</small>
橋弁慶 <small>夏寺</small>	熊坂 <small>夏寺</small>
小督 <small>夏寺</small>	野守 <small>夏寺</small>
張良 <small>夏寺</small>	羅生門 <small>夏寺</small>
鉄輪 <small>夏寺</small>	雲雀山 <small>夏寺</small>
谷 <small>夏寺</small>	半 <small>夏寺</small>
車僧 <small>夏寺</small>	吉野天人 <small>夏寺</small>
烏帽子 <small>夏寺</small>	大瓶 <small>夏寺</small>
鶴 <small>夏寺</small>	春榮 <small>夏寺</small>
土 <small>夏寺</small>	舍利 <small>夏寺</small>
小鍛冶 <small>夏寺</small>	合浦 <small>夏寺</small>
葛葉町 <small>夏寺</small>	六浦 <small>夏寺</small>
金札 <small>夏寺</small>	大江山 <small>夏寺</small>
岩船 <small>夏寺</small>	俊成 <small>夏寺</small>
七騎落 <small>夏寺</small>	弱法師 <small>夏寺</small>
絃上 <small>夏寺</small>	放下僧 <small>夏寺</small>
籠太鼓 <small>夏寺</small>	枕慈童 <small>夏寺</small>
胡蝶 <small>夏寺</small>	松虫 <small>夏寺</small>
鳥追舟 <small>夏寺</small>	水無月 <small>夏寺</small>
雨月 <small>夏寺</small>	土車 <small>夏寺</small>
國 <small>夏寺</small>	雷電 <small>夏寺</small>
菊慈童 <small>夏寺</small>	

高砂

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

尾山

高砂

高砂の尾山は松尾年
少くも老乃海もより
下流の海流はなほ
松尾の海流はなほ
松尾の海流はなほ

同

高砂の尾山は松尾年
少くも老乃海もより
下流の海流はなほ
松尾の海流はなほ
松尾の海流はなほ

同

高砂の尾の方の松多きあり
 霜をたれきども松が枝
 の葉も同じ深みより生ゆる陰
 の初葉はゆげを落葉の重なる
 葉あり松ありの敷う野をて
 きを程木乃うらあき毎のぞく
 葉もさきの木乃中まのそ
 葉はゆげのためにも相まの松あ
 てなき

同

高砂の尾の方の松多きあり
 霜をたれきども松が枝
 の葉も同じ深みより生ゆる陰
 の初葉はゆげを落葉の重なる
 葉あり松ありの敷う野をて
 きを程木乃うらあき毎のぞく
 葉もさきの木乃中まのそ
 葉はゆげのためにも相まの松あ
 てなき

くふる くれを 城樂乃ま
 ぬ 肉て 万葉の 小名衣 期
 ぬ ぬあよき 悪魔をくらひ ぬき
 むす 手よの 壽福をくらひ ぬき
 の 民をたぐ 萬葉の 命をた
 ぬ 相まの 松乃 霜乃 津ぞた
 ぬ ぬ

田村

高砂の尾の方の松多きあり
 霜をたれきども松が枝
 の葉も同じ深みより生ゆる陰
 の初葉はゆげを落葉の重なる
 葉あり松ありの敷う野をて
 きを程木乃うらあき毎のぞく
 葉もさきの木乃中まのそ
 葉はゆげのためにも相まの松あ
 てなき

らしつて教ふ身は身を愛し
 て、此の心をくはみくはるる處よ
 別れをなすや、
 手觀音乃、先を教ひて、
 密に花行し、千に手、
 出悲乃、弓の智恵乃、
 ぬて、一度もあきば千のや、
 雨あられと降りか、
 ぬる、おれき、
 夕、夫先よ、
 らま、
 や、
 乃、
 音、

還着於幸人、
 乃、
 音、

江口

名、
 ひ、
 手、
 茶、
 平、

子らや

同

紅花の葉乃り錦繡
此山梅をあらみえ
の風はあつたれ紅葉の秋
乃又黄銀銀花を
とくは葉の秋より
松風葉をあらみ
客もさつとあつた
恨紅花をあらみ
そいつ乃はあつた
松乃心あつた
倫の葉をあらみ
おれもあつた

ハ色きういふ思ひ
は又ある時を
の心とあつた
おれもあつた
や皆人の心
根の葉をあらみ
そいつ乃はあつた

同

おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた
おれもあつた

毛あらふりあや秋は
 悠乃宿思へむかり乃宿思
 子あを人をなほしあ
 是あてありや歸をそ
 賃を藤とあらわれ
 とありつる老りともま
 白雲よりち繁く西乃
 子ゆきほふ有程くぞ
 ゆらありがさくこらり

理女

舞去まも我妻乃秋より
 加あらはれも然乃ぬま
 あらど言葉の人頼めて
 ぬあつそれとも様平ま

くらしてあつあつの
 むまべの秋用あり
 山鹿野のあつ松を
 か音作れ我まつ人
 ねとつれをいつま
 めてものかさ乃扇
 て風乃たよりと思
 元もやまきまどの
 ひをあまのまの
 乃扇もゆきあれを
 も吟声く秋風うら
 ありあや思入を
 実あまのれあま
 むくいあれを今

てんをもちうらなむきまどいんを
これぬしのねを思ひつづきを
てをとり居乃現女が国が所
ひきま

同

喜月をかくして懐きもあたる
あまぎ整ひた袖を三重がさ
ね其を衣乃つまらう
ねごとをかあらんと夕暮の
月日もかきあり枝の
吹どもをまきの葉の
ど乃便りもまきそ
舟虫の音もかき
契りありよあや
あや

の扇よりうらなむ
てある物の心ありまき
やあまぎとるあまぎとる
でう遠くふねをく

鴉飼

面白乃あり横や座も
る無火よれどろく魚を
のかがまきとすくひあま
際外く魚をくらふ時あ
も報もぬれ世も忘れ
ておもひや水の水のよ
あらばいまの鯉やのぼ
ん玉焼河はあらぬた
あまぎとるあまぎとる

魚ハもまたアノ形ヲまぎや
カリ火ノもえてもカキの
暗クあるハ思ハルアリ月
子ありぬ内前ハヨウ
舟のかりりき流して海路
は海子此子の名海をい
を如神はせん

同

眞法華ハ利益ありき及魔道
子況や群おるをすく
ん焉子ありたり外有
まちうひられ妙乃一字ハ
るいなる非れきハ
の誠き妙ある法とすれ

テリ 経ハあどやあづく
質ハ非れを教乃あどよ
てハあづもあく云む
あくハ心繁乃徳より
てあらき子志づるを
ううひかりまの悪人ハ佛果
をえんハ此経乃ちから
あらんや是を刀ハかきを
きく時きハ 徳悪人成
きくも慈悲のそろを
きくして像會を供養を
るあらざる乃結縁より
つハ因果善提よるを
実徳来ハやく他を

はるき波あれく

難波

難波津は笑やその花冬を
きりぎりす今も春は白ひ
きりぎりすを梅の風枝を
らさぬみよしうや雲や津の
國乃あよみ乃りよまよるは豊
ある世の解くもそふ道廣
ま治めあれく

同

舞あられきりり乃音楽や
時乃調子よかきりりき
尊勝乃樂をん知其風や
ろ共よ花をちりりしてきり

とらう 秋風樂のあや
あまの風きりり共よ浪をひ
うきりりきりり 萬歳
樂を 非乃乃う 音海
波やのあ波海の 初くたき
うきりり 捺糸老 抜頭乃曲ハ
かきりりう 入目を振まき
年よきりり今乃太鼓の浪お
れどよりてのうちかきりり
はるき音樂よひ身乃う
人出作よ又出天下を身り
さむく天下を身を治る萬歳
樂りめでしきりり

兼平

昔三ふの機を頭からして二千
 今乃能徒をまき圓融乃法也
 曇あき月の横門をみしきり
 やね又麓の山は飯や志を幸
 侍乃一松社の神輿乃幸
 の指成べしは浪のこもれ棹
 こがきゆく移は遠なるり
 以乃うら良志粟津の森
 ちちく成てはををまら
 飯の昔梅がら山松の青
 紫きて面敷を夏山乃う
 つりゆくやま海の紫赤の志
 づくも眼を惜まらあは
 乃まをまら
 破ぎの雲は

子早く返はかりく
 同

提氣平のかくぞもあらで戦ふ
 其際少くも実乃此所供を心
 かくるばかりあり 松を及魚
 乃たも敵乃方よきまて 林
 曾殿うくれ給ひ思と 地
 乃た聲をゆきよき 今
 何ぞも期すまきと 思ひ定
 て氣平を 是ぞ家那の意
 言し 鑑ふんむり 大音あ
 げ木曾殿の所乃は今井の
 甲印も氣平とあかりかまそ
 大燈もわつらひまらば茶より

尋常千乃。秘術を頭へ大蔵
 を栗はる。行は進めあり。破る
 竹浪は。まくりきり。手十字字
 手破り。かき通つて。其は。自害
 乃手本。よきて。大刀を。入つ
 け。多海。は。ね。ち。て。つ。あ。ぬ。れ。う
 勢。ま。き。り。の。ね。ひ。ら。か。家。後。乃。志
 ぎ。目。を。ね。と。ろ。あ。り。と。海。か
 せ
 千手

妻所を。ま。り。と。押。ひ。ら。き。ま。の
 進。凡。自。ひ。く。る。花。此。都。人。ま。つ。つ
 し。あ。ら。又。く。ま。あ。や。東。の。果
 し。進。人。の。心。は。奥。深。き。其。情。社。報

柳屋のま紅塔。秋だ。思ひ
 とありぬ。境

同

柳屋の。柳。子。か。柳。重。衛。も
 び。ん。と。ま。り。ま。い。つ。か。ま。あ。を
 置。る。ご。と。く。ま。の。の。が。れ。悪。た。る
 愈。々。乃。生。ま。れ。つ。あ。り。て。う。ま
 分。と。う。ろ。の。の。其。ま。は。志。づ。こ
 ち。果。を。て。名。を。社。あ。ぐ。を。り
 都。の。重。房。が。手。は。渡。り。心。乃。罪。の
 都。り。り。ま。や。世。平。の。は。あ。あ
 ま。れ。緒。乃。月。時。面。際。む。奈
 良。坂。の。能。使。の。手。は。わ。り。あ。は
 ど。あ。か。く。も。果。を。て。又。鏡。倉

小渡さるゝ愛のりづくぞ八橋の雲
 井北都らつらまゝの三行の煙を
 舟から箱根うちすぎて煙
 やまらし早月夜うらら山入
 しづばらき限りぞ思ひ
 まあられの夜そ志のひねる昔
 を白妻乃燈暗うしてぬ行
 ぐさあんづの雨さるる枝
 のや面よき秋のきれら
 何ともなまひの袖思ひの色ふ
 やあ最後候とて入て内も
 けあふえの枯ぐだま花さく千
 手の袖あらばぢねぐらわ
 心

紅葉狩

見ゆてはふきまづうか
 たらそ秋はまづり留むきさ
 けがも木はあらけり心よわく
 もまゆふ可き山踏ら菊の酒
 何れも苦しむべし

同

見ゆればぬもいぬめれ道の橋
 舟をれとけり飲酒をやづり春
 へ非婚妻語そろたはれ心乃祀
 うららわらぬ安きまゝ世もた
 あらしの山麓よそののんもい
 あらんわが思へ思へてし

前世の誓り候らぬやうき情
 け色みえておぼしも道のな
 草葉の露れかこもむく
 ぞ頼まゆくまどちぎるもたれ
 うちつくるよの心もあらや
 空ぶらぶらるる瓢箪をうか

老松

老松の枝のくゞくゞ 梢のわり来乃
 花の袖 廻の老木の幹松乃ちよハ
 刻の老木の幹松乃ちよハ
 多よはちぎる名れおほなるか
 りて苔のむままで 新苔のせ
 ままぐ松竹づかめ 雲の
 心をうつくる 雲きこゑ 行舟の

まも祀と我神誌乃つぎを志
 外五松也も梅をまき
 軒よりめてたきれ

頼改

名も似て月こそ物さ朝日
 おく 歎れぬも歎みそて
 やまはらへる志海氷舟山
 も川もたほろくもして是
 非をこころぬ氣色く孔とや
 名やたかむやちちるや
 治の里やへる増る名雨乳

斗の筒

斗の筒のさうりば在る赤乃松なりてかく

松を老たす塚乃茶是社を
よあき跡乃松樹少くまき乃徳よ
出さる川の名跡あるらん
乃真あるれいすの徳
くき氣色乳く

同

井筒の徳乃井筒よ
かきしるかたき
外にお
あがら又え
昔男れ
平乃面敷
我あがらなる

まいの塗の志ほめる花の色
うそむひゆりき在るの寺の
鐘もほのく
松乃やまをたぬの
醒よをりゆめん破きあきよ

天鼓

面自や時
や松の青柳葉を掃
く星をあらひ
鶯此橋の危
くたの前
夜半
南星を北
づら

櫻の月も嘯き水も戯き波を
 うからし袖をひきよや夜遊の舞
 樂も時をて五更の一点鐘をあり
 鳥も八聲のほろくもあを月
 志らまの時を敷敷のちつれあま
 の志ま又打等てうつらう尊ら
 まる打茶てうつらうか身はあ
 しと社ありまきれ

白楽天

上清
 玉女より現る給はく伊
 勢石清水賀あうんか鹿嶋三
 嶋詠訪契田安藝の巖島乃
 明神も盛歎最巻玉の第三
 乃娘もやまて海はまうらま

蘇青樂をまひ給はく伊勢
 乃ち了ま乃曲とらうら
 子如きりつてまひ遊子お思
 其の羊月神をまひ思ま
 まして唐にまひ思ま
 是をりるるる花や神とま
 方かや神と君代のうらま
 烟ぞひきまきく

實盛

上清
 博くらぬよりの錦乃ひき
 かく前黄白ひ乃鑑まを金
 作の在り乃今乃身まき
 ともも行り實乃地の蓮の臺
 社たくら成まれ乃疑のぬ

後乃教へち行もさぬ金のを察
ねほくせはかどる至ら所
まきく

同

又又威が錦の直翁とてさる
私あらぬ愛ありか威都を
物一財宗威公よ中核古郷人
錦をきて帰るしつる年文
あり又威生國志都あ乃志
と依ひし一書を年解領つ
きられておし下長弁は借
侍り依まき流度か國よみ下と
てゆゑ定て討死侍る一老
ほの思出是さるし一海免あき

とやまゝは都地の錦の
直翁とてさる
は古予あもそみぢをわま
ゆきふ錦まきて家は帰る
やまゝ病と憤しも此奉女
心ありはまもも志業買後
錦の衣を金銀もよ翻し今
のる威公を小國の成よあ
かされあうりらるる名末
侍るか母の月のようにから
物語さるる

同

美其執心の修経乃道かりく
て又あはれ勇とらまむとた

くろくを平塚めは隔らせ志を
 念ふ人うよあるづら兵隊と
 ありの中も老まき手塚乃
 右郎光威一平叔の義を討を
 ととをか隔りて突感と
 押あつて組氣を討つれ
 老のまき日本一平剛の者と軍
 隊はよして戦ふ平塚は押
 首かきまき手塚乃
 手塚乃手塚の右郎光威が我
 さまありて学擧とありて擧
 二刀さへ氣をまきと組二足
 があひはるるさきさきか老武
 の邊さき軍よる志のれり

よちある松木の力えをれり手塚の
 まよあつて氣を平塚を討つて終
 よ首をかきまき手塚乃
 とありて戦ふ手塚乃
 影も散る南無阿弥陀仏
 ちびはあつとありてたびは

楊貴妃

我れそのかきと思ふ諸仙さま
 昔のちれとありてありよ人
 思ふよ生れまきて楊家の深窓よ
 養われいまさき人ありよ
 天宮にたれつるさきめし
 宮に定められた仙僧老同
 かきらひも縁つきぬまいたづら

不_レ又_レ此_レ鳴_レよき_レひ_レり_レ入_レり_レ暮_レに
 て_レま_レ身_レ水_レ急_レあ_レた_レれ_レを_レう_レり_レき_レの_レ事_レ乃_レ
 露_レの_レた_レま_レあ_レひ_レ見_レし_レり_レ移_レ
 は_レ傳_レき_レう_レき_レむ_レら_レし_レら_レ傳_レき_レも_レ
 ぞ_レ自_レ物_レ身_レを_レ恨_レ見_レあ_レる_レぞ_レ又_レ月_レの_レ七_レ
 日_レ乃_レ後_レ者_レを_レか_レか_レむ_レつ_レて_レく_レ乃_レ比_レ
 職_レき_レん_レ地_レの_レ言_レの_レ祭_レも_レか_レき_レく_レよ_レ
 ち_レき_レし_レめ_レど_レの_レ際_レ乃_レし_レの_レ契_レ
 り_レな_レも_レ名_レ珠_レの_レ思_レふ_レあ_レら_レし_レあ_レる_レ境_レ
 して_レや_レ月_レ乃_レあ_レれ_レて_レた_レら_レ世_レ中_レ
 は_レあ_レら_レぬ_レる_レれ_レの_レあ_レり_レを_レん_レふ_レ世_レも_レ
 人_レは_レあ_レう_レひ_レて_レま_レふ_レし_レそれ_レと_レ
 も_レの_レが_レき_レえ_レぬ_レ者_レを_レ思_レふ_レと_レ
 ま_レく_レ時_レを_レあ_レふ_レら_レう_レあ_レれ_レあ_レり_レ

きれ

玉音

青_レ々_レ々_レの_レ雲_レ霧_レの_レ迷_レひ_レも_レ
 ず_レや_レう_レかり_レき_レ念_レを_レ初_レ瀬_レの_レ山_レ
 飛_レび_レき_レく_レあ_レち_レて_レ露_レも_レあ_レい_レど_レ
 も_レ敷_レく_レあ_レま_レり_レの_レ身_レも_レ行_レ累_レ
 う_レら_レあ_レや_レう_レら_レら_レん_レ人_レも_レ世_レを_レ
 毛_レ恨_レま_レん_レ人_レも_レ世_レに_レ思_レふ_レも_レ
 今_レの_レ身_レを_レひ_レと_レつ_レら_レ報_レい_レた_レ罪_レや_レ救_レ
 この_レう_レき_レあ_レま_レり_レも_レ恨_レ悔_レ乃_レ有_レ
 恨_レあ_レら_レひ_レわ_レき_レあ_レり_レ者_レも_レあ_レ
 の_レ思_レふ_レよ_レむ_レき_レひ_レの_レ身_レも_レあ_レら_レあ_レ
 や_レん_レ身_レより_レあ_レる_レま_レも_レま_レで_レい_レめ_レ
 だ_レ當_レは_レみ_レづ_レれ_レつ_レる_レ影_レを_レあ_レや_レ

愧しやとて此を執としるるは
まは乃玉らら心真如の玉
づらあがき夢路の覚はきと

賦

実やよし月よあちなる
の浦わの秋もあちなる
も風も立ありや霧の
かたれた物も立候り昔乃
陸奥のちの浦わの秋も
か乃ららわとあち

同

詠めぬうあちなる空の白雲の
や暮そむるを山嶺を木
乃たるぬあち成りあち

あれ社大なるや中庭乃山を
社乃後乃うあちなる
の芳乃や秋もあちなる
あちなるや秋もあちなる
の何くぞ秋もあちなる
ま行松の尾乃尾乃み
嵐交り秋の夜の
月影は乃秋もあちなる
際も乃月もあちなる
あちなる秋もあちなる
秋乃よれあちなる
づらあちなる
子乃浦あちなる
め乃月もあちなる

歸る後乃よりの老人と力くつ
が塩屋子かき給てて跡をえ
に成り終るも又き給成り

同

美々の西留子入日暮しまど近きれ
はる影ましくけりたよる月の
あかきほけりまきごとく
ありし青陽のまきの始り
慶む女乃遠く一樹乃色三
日月の影を舟もたつり
又水中の遊魚を釣と舞子
上れ花鳥の引け法も多
一輪も降らぬ水もとら
鳥の他處の樹は宿し

月下乃波よき
秋の夜を月も
寄きて月も
て月がけ雲と成
よはそりれて月の都は
うおひあらぬ
やあうりし乃面

養老

上言
長生乃家よき
あるあるよ是
もさるの世乃
志井乃水き薬
くさるるを
きりきれく

同

青^{ナニ}老^{ナニ}を^{ナニ}だ^{ナニ}よ^{ナニ}春^{ナニ}の^{ナニ}ま^{ナニ}り^{ナニ}て^{ナニ}威^{ナニ}乃^{ナニ}人^{ナニ}
 の^{ナニ}身^{ナニ}を^{ナニ}薬^{ナニ}と^{ナニ}あ^{ナニ}ら^{ナニ}ば^{ナニ}何^{ナニ}と^{ナニ}も^{ナニ}毒^{ナニ}の^{ナニ}
 命^{ナニ}を^{ナニ}盡^{ナニ}す^{ナニ}と^{ナニ}い^{ナニ}ふ^{ナニ}泉^{ナニ}を^{ナニ}め^{ナニ}て^{ナニ}た^{ナニ}か
 り^{ナニ}も^{ナニ}な^{ナニ}ら^{ナニ}ず^{ナニ}や^{ナニ}玉^{ナニ}の^{ナニ}水^{ナニ}の^{ナニ}お^{ナニ}と^{ナニ}す^{ナニ}め^{ナニ}る^{ナニ}
 は^{ナニ}代^{ナニ}を^{ナニ}と^{ナニ}て^{ナニ}流^{ナニ}れ^{ナニ}ど^{ナニ}我^{ナニ}ら^{ナニ}ま^{ナニ}さ^{ナニ}く^{ナニ}
 豊^{ナニ}は^{ナニ}ま^{ナニ}あ^{ナニ}る^{ナニ}故^{ナニ}に^{ナニ}さ^{ナニ}し^{ナニ}く^{ナニ}

同

警^{ナニ}者^{ナニ}を^{ナニ}ま^{ナニ}く^{ナニ}は^{ナニ}は^{ナニ}水^{ナニ}の^{ナニ}お^{ナニ}と^{ナニ}す^{ナニ}め^{ナニ}る^{ナニ}
 を^{ナニ}流^{ナニ}す^{ナニ}て^{ナニ}陰^{ナニ}を^{ナニ}く^{ナニ}思^{ナニ}を^{ナニ}あ^{ナニ}お^{ナニ}か
 く^{ナニ}は^{ナニ}作^{ナニ}と^{ナニ}て^{ナニ}幾^{ナニ}久^{ナニ}く^{ナニ}さ^{ナニ}も^{ナニ}あ^{ナニ}お^{ナニ}せ
 ど^{ナニ}や^{ナニ}つ^{ナニ}ま^{ナニ}せ^{ナニ}し^{ナニ}君^{ナニ}よ^{ナニ}ひ^{ナニ}ら^{ナニ}ぬ^{ナニ}ま^{ナニ}さ^{ナニ}
 の^{ナニ}身^{ナニ}を^{ナニ}時^{ナニ}に^{ナニ}下^{ナニ}に^{ナニ}も^{ナニ}流^{ナニ}ら^{ナニ}ぬ^{ナニ}能^{ナニ}
 律^{ナニ}の^{ナニ}水^{ナニ}の^{ナニ}お^{ナニ}と^{ナニ}す^{ナニ}め^{ナニ}る^{ナニ}

萬歳

も^{ナニ}ま^{ナニ}の^{ナニ}代^{ナニ}あ^{ナニ}れ^{ナニ}や^{ナニ}く^{ナニ}
 り^{ナニ}み^{ナニ}ち^{ナニ}の^{ナニ}代^{ナニ}あ^{ナニ}れ^{ナニ}や^{ナニ}く^{ナニ}

借經

借^{ナニ}經^{ナニ}は^{ナニ}三^{ナニ}寶^{ナニ}の^{ナニ}珍^{ナニ}果^{ナニ}を^{ナニ}と^{ナニ}
 心^{ナニ}を^{ナニ}門^{ナニ}の^{ナニ}氣^{ナニ}を^{ナニ}う^{ナニ}し^{ナニ}か
 ひ^{ナニ}旗^{ナニ}を^{ナニ}た^{ナニ}と^{ナニ}て^{ナニ}足^{ナニ}を^{ナニ}わ^{ナニ}車^{ナニ}に^{ナニ}
 ま^{ナニ}ご^{ナニ}と^{ナニ}運^{ナニ}ぶ^{ナニ}る^{ナニ}は^{ナニ}な^{ナニ}ら^{ナニ}ぬ^{ナニ}
 家^{ナニ}は^{ナニ}長^{ナニ}門^{ナニ}國^{ナニ}へ^{ナニ}も^{ナニ}敵^{ナニ}に^{ナニ}な^{ナニ}ら^{ナニ}ぬ^{ナニ}
 心^{ナニ}を^{ナニ}無^{ナニ}に^{ナニ}し^{ナニ}て^{ナニ}い^{ナニ}づ^{ナニ}く^{ナニ}
 も^{ナニ}あ^{ナニ}く^{ナニ}れ^{ナニ}し^{ナニ}心^{ナニ}を^{ナニ}う^{ナニ}し^{ナニ}か
 飛^{ナニ}ぶ^{ナニ}る^{ナニ}は^{ナニ}世^{ナニ}の^{ナニ}う^{ナニ}つ^{ナニ}夢^{ナニ}
 袂^{ナニ}に^{ナニ}あ^{ナニ}れ^{ナニ}保^{ナニ}つ^{ナニ}て^{ナニ}ま^{ナニ}の^{ナニ}花^{ナニ}を^{ナニ}と^{ナニ}
 永^{ナニ}の^{ナニ}秋^{ナニ}の^{ナニ}紅^{ナニ}葉^{ナニ}を^{ナニ}と^{ナニ}て^{ナニ}教^{ナニ}を^{ナニ}あ^{ナニ}り

岸の遊手がほある後乃波志らば
 のむせある松のほの成のさるを
 びる多敷くし所をまひて後清
 後心よめる思亭うたふて
 もの備乃徳宣あらたよ心現よ
 こころわり誠を直乃かへよ宿り
 こと一筋よるなりあぢきか
 やさもまきやまの露乃を拵ねま
 後よまき若れ浪よらうめれ身
 ばよひらつらまぎらうまをあ
 流よせんしとるまきの人よ
 作らまうとありや晴の月も
 きまきて奴のつらまおが

岸の遊手がほある後乃波志らば
 のむせある松のほの成のさるを
 びる多敷くし所をまひて後清
 後心よめる思亭うたふて
 もの備乃徳宣あらたよ心現よ
 こころわり誠を直乃かへよ宿り
 こと一筋よるなりあぢきか
 やさもまきやまの露乃を拵ねま
 後よまき若れ浪よらうめれ身
 ばよひらつらまぎらうまをあ
 流よせんしとるまきの人よ
 作らまうとありや晴の月も
 きまきて奴のつらまおが

同

多敷の道はちちりきくも
 まきかまきほめき寄しきか
 鉄山の鉄山雲乃もついで
 うまの鉄道の御見の眼の
 光を鏡のしり通す道場無
 法性も又ささ蔽うつはびく
 は西海の因果をみさく是
 ありや城の寂野は十念さ
 法乃身は頼りまは疑ひも
 空もさうの法性があるも
 よつものが因果をさうさ
 こきれ

采女

高城の大臣初は藤口みちの
 まのぶちぢり鏡も皆さ
 ねろそちありとてまうき
 ちりきれれもあやせん大
 君れ心さひさるまは采女
 のかちらきさきここの城乃
 は心さけ寂感をもくもあ
 ちれはあさう山陰さるあ
 此あさくを人と思ふの心
 らき風をさへり雲は安全
 をあんとやあまき采女の
 まのひさきさうつら花鳥
 ま乃お雲乃袖影もめぐお
 ぼの清遊の又き乃おそ采

女乃夜れ多そつて大宮人の小忌夜
 様とかなひあたるけりもれを
 正色をあらをあら様秋の曲指
 子とそつて被とびるる
 快好なる宮女乃夜うたあり

同

松の葉の秋の教うせむきく
 来乃つらあかくつり鳥た
 絶つ天地たなる國太安根
 四海波静あつて横欠の池の面
 子澤の池水面は氷高きつて
 まるきりくさるるや
 又んは雲起りてあそぶ
 をねあはれ樂のよきならは是れ

の花もまきあはれを讀
 の国縁ある物をゆく吊をせ
 中として又浪はまりする波
 の感入るるまき

通小町

月をまつら月をばまつらん
 おきこまきまきとららるる
 あつてかすくはれ
 思ひれれをあらそ
 すかきもたあれあ
 ちよあはれひりねあらつら
 らどかやうとらと盡
 くれそつて欄のおるんて
 くれれ十九あ前のし飯のひ

およらきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうきやうき
 ぎてゆききすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすく
 別ぐれりかざりるは
 ともぬぎのしそ
 乃かきね
 ちりたる後
 うがや
 舟の櫓衣の衣
 きつくろひ飲海
 うきま
 むたを
 ちくれば
 の小町
 ますりく

小袖曹我

上
 舞乃が下れ其ひまはく
 めをひききだれやかまりの親子の
 舞乃と思入は舞乃をつきまぬ
 かかろりまよ
 と舞乃で
 りれをえそ
 望をとしきん
 惠のほの
 ねろ
 が開は
 兄身
 マ
 竹生嶋

昔の海は深く。國のあまのほ
 ちき。あまのま。あれ。花のあま
 ら。自らの。あまの。あまの。あまの。
 ち。あまの。あまの。あまの。あまの。
 ま。あまの。あまの。あまの。あまの。
 仲。あまの。あまの。あまの。あまの。
 思。あまの。あまの。あまの。あまの。
 行。あまの。あまの。あまの。あまの。
 緑。あまの。あまの。あまの。あまの。
 乳。あまの。あまの。あまの。あまの。
 う。あまの。あまの。あまの。あまの。
 鳴。あまの。あまの。あまの。あまの。

同

昔の海は深く。國のあまのほ
 ちき。あまのま。あれ。花のあま
 ら。自らの。あまの。あまの。あまの。
 ち。あまの。あまの。あまの。あまの。
 ま。あまの。あまの。あまの。あまの。
 仲。あまの。あまの。あまの。あまの。
 思。あまの。あまの。あまの。あまの。
 行。あまの。あまの。あまの。あまの。
 緑。あまの。あまの。あまの。あまの。
 乳。あまの。あまの。あまの。あまの。
 う。あまの。あまの。あまの。あまの。
 鳴。あまの。あまの。あまの。あまの。

柏舟

新坂乃藤子忌一スレク人
 内もわらぬ時染いつ迄奉ら
 まぐちも志らぬ心あき後ら
 ちづくし行移は松尾をさ
 びきみか幸盤乃里の文う
 よんぐへく袋ある此所と
 よ身をこがしめ申つた下
 乃里とくやうまは積らぬ
 のあさのしらふ是さく相
 花燐井の上乃山を東ま
 て西へ白へ善光寺に
 池や東や狂乱の相直ぬ
 礎一素とみちりおひませ

同

教の本末をさかすの所は
 とき此善光寺乃如來堂の内陣
 社の極樂の九品上生乃うて
 ぶお人の集りまきこのは
 とふうもこれへ集らぬあり
 南無阿彌陀仏 頼
 釈迦のやまみちの道一筋
 方極樂の光におと生乃内陣
 乃誓りまき此寺の常乃燈
 陰頼やお念仏を人

念ふやうなき

同

三昧の眼は遠くも月の煙胸
まじらふ情是を筆のまじらふ三界の
流れて行く人の妄執の暗翳
三雲のまじらふ月乃かきや座を
地真如平持た臺に至らんとだ
も教をばして煩惱のまじらふ
信はまじらふまじらふ罪障
乃山高く生る死の海ふり
まじらふまじらふ此生は此身をば
まじらふまじらふまじらふ人ば
三四意三の道の道れはかり
まじらふまじらふまじらふ法も

三昧の眼は遠くも月の煙胸
まじらふ情是を筆のまじらふ三界の
流れて行く人の妄執の暗翳
三雲のまじらふ月乃かきや座を
地真如平持た臺に至らんとだ
も教をばして煩惱のまじらふ
信はまじらふまじらふ罪障
乃山高く生る死の海ふり
まじらふまじらふ此生は此身をば
まじらふまじらふまじらふ人ば
三四意三の道の道れはかり
まじらふまじらふまじらふ法も

ちびの今の我ががねぐりま
 妻のゆくををたら雲のたあひ
 山や西乃堂の彼國をへつて
 ついでの後とあやをを叶へば
 べしは存るも鐘の音も聴く
 て燈のよき光ぞとあやぐありや
 南無拜命はたさねぐりまをう
 ぬか

阿僧

ちびの今も徳も出雲乃のあがら
 頭もくも執心の浦あつら
 の値もつれは樹乃宿りも他
 の縁も同物をたぬれも亦乃世
 ちびの値もつれは樹乃宿りも他

ちびの今も徳も出雲乃のあがら
 頭もくも執心の浦あつら
 の値もつれは樹乃宿りも他
 の縁も同物をたぬれも亦乃世
 ちびの値もつれは樹乃宿りも他

同

ちびの今も徳も出雲乃のあがら
 頭もくも執心の浦あつら
 の値もつれは樹乃宿りも他
 の縁も同物をたぬれも亦乃世
 ちびの値もつれは樹乃宿りも他

とも因果のめぐりあはるる火車よ
 業つてゆくは苦めく。目のまへの
 地獄も滅ありをたぬうらうら
 きーきや。思ふもうらやめ
 いちのうらや。思ふもうらやめ
 あこぎがはらうらよ。おほ執心の
 まじくあこぎ手。うらうらうら
 のかへん。思ふもうらやめ
 蓮花の蓮うらや。身をとくめ骨
 けく。思ふもうらやめ
 燃の焰もうら。雲霧もうら
 際もあこぎ。冥途の責も。慶重お
 るあこぎ。浦の罪科をうら
 き。思ふもうらやめ

たひ念としてまの浪う。入まきり
 まるあこぎ。慶う。入まきり

志賀

非を惜むべ。君が侍のどき。心を
 やま乃花。慶う。入まきり
 おこ。思ふもうらやめ
 てまの向。思ふもうらやめ
 樂乃。思ふもうらやめ
 花。思ふもうらやめ
 の。思ふもうらやめ
 ぐ。思ふもうらやめ
 ば。思ふもうらやめ
 の。思ふもうらやめ
 務。思ふもうらやめ

て神がくらきまの面自まのわあへん
れく

傳

即降恨志まうりて玉神を
しておびくたまひらき
我あはわざしかりを
おひもすらけりし頼政を
あつれは交えうせり
くし地よたれり
一車馬も頼政が
志は天野を
と社名を
神威あつて
を頼政は

屋餘りて
おそ
りあつて
よあが
右の
を月
月
に
す
ら
ゆ
乃
海

日もたつてはくらくらきり暗き交りふ
ふんふんきりたるかよ懸きよれ塔のハ
こまよてはらせ山乃端の月と共は海風
毛空よまきり海月とたよらりよ
きり

大原御幸

ありはきりもきりひまより落く
水乃音はくよりかてきりく
垣中おたの乃山後よかくた筆ふ
も及びが下室乃常堂あはきり
やききてきりかては香を焼
どぼりたりきり八月も又常
の灯をかぐくはかきり可物
ごやく

同

あやの軒はれ志もハサ
あつ免 刻去過夏もハサ
まつりれおあきん青茶ハサ
お夏木おま乃名あづき
まろり 刻去過夏もハサ
サ 花乃かきりハサ
志きりんがるれうこあきり
ハサ 道の末ハサ
お夏木おま乃名あづき
惜めたハサ 刻去過夏もハサ
まの松がえは候うハサ
後あつかきりハサ 是も清幸を
おがはる青茶かくれのねる様

つら花よりもあつらかな中をゆく
かきふるか根をなすに教をよき
梅くもかたしをれしや此清幸家
たはなりの志づりて移し有言
居成へりや

梅枝

うかりし身は昔をゆんぎり
たえん去きしも枝あがらぬ
きき意路はれもれもあがく悪
よ塵ききしふれはるや女心の能
髪ゆひりひあらしも意衣乃妻の
笠を戴きし此襟衣をまじつ常
ちあかり此古鼓のねをきん
さすは敷敷妙の枝がらふは執

心きりしは松ありあはる
よの今に松や思ふもあはる念
の髪かやまうとあつたつる
薬ありし故人の教あはる思
く意しき草を佳き居
よねあはる花あきへ手打や
し我心ありあききぬ乃思
純心をたしき強心を

同

ヨロシ面息たあはる
かあて愛意の心をまて終へ
だくしらば愛純の雲霧をす
よね月あはるば映夜半樂をか
あてん心ききし佳吉の松乃際

より遊むまづ 浪をてゆふは路
 かたき仲も志のまゝ海の小春
 海は乃浪然 如くや袖のたを
 ひく形勢の梅は鶯れ 其夜や
 花の結願樂 引く入らうあへ
 梅がえ 梅が枝は秋鶯のまを
 へ凡そまぢりまじん花は宿る鶯
 面白や鶯のしく 巻は後引を
 られく花の陰はありありと我
 そあはは引後れきしく 奏り目
 ありままふ舞は袖是こそ女れを
 何を多る想まゝ志乃樂の敷ら
 あり様もさるやあは思ひあつし
 をしく かるか程も純心ごと

神さば月をり 音楽のねど松
 風はたぐへく 有らぬまをま
 歌さうりやあはらんく

誓願寺

名中
 能表遊中 誓願寺
 志名ハ志きん 親世音 三世利益同
 一神多松や枝らがたあは悲願を
 り 我我成佛乃老りをうさ
 のの人れ わが力よゆまがま
 法は清毎のまあま樟木でも
 渡る彼岸はいつくして樂を

極る國は道ありきや。十惡八罪乃
まよひの雲をさしぬき如月
西方も安を去りてをからん心
此淨土と此世を預ちとねむり

同

此の國は道ありきや。十惡八罪乃
まよひの雲をさしぬき如月
西方も安を去りてをからん心
此淨土と此世を預ちとねむり

蟻通

此の國は道ありきや。十惡八罪乃
まよひの雲をさしぬき如月
西方も安を去りてをからん心
此淨土と此世を預ちとねむり

同

此の國は道ありきや。十惡八罪乃
まよひの雲をさしぬき如月
西方も安を去りてをからん心
此淨土と此世を預ちとねむり

一 序巻に志すよりも痛のや
 あへあくるもおぼなたちをぬき
 ちつひは清頭をうちたせり
 しのほろよるは思ふをうらむ
 や彼人の脚死骸を見せれば
 とももまごころき長月比の
 ぐまうりありまらびはあめ
 き時ぬがうかまむらまぢ錦
 の直寄きたるのつひまよも
 ト 如く候はるまきんだちれ中
 子社あはらめを頼名床しき
 ありえびらまきれんきや
 ぢらんまやかくまられり又ま
 べ機籠のむらまゑ候はれり

此下陰を宿をを相和やこよひ
 あうらあまの忠度をかた
 ねの鏡ひあらん杖とほろ
 きたりまのあまをまを痛め
 水陰を核れ宿とまはれり
 ありま
 ありま

熊野

四條又條の橋のうらむく
 男女貴賤都鄙のあはれ
 袖をつらねて行はるる雲をみ

して八重ひつる味九事は花威名
よれおほきなきしきゆく

同

吉原おきてとび行はるる心乃
花を多く車大路やおぼの地
花堂よりかかき親音を
同座あり。園撫杖の方便あらん
よらちもとほをも給へや
身りの末せくも頼ま命め
乃愛宕の寺をたつらぬ道の
せうや突おそりや此道の
冥途は通ぬ物と心ほそ鳥部
め煙乃もを藤震むきも
松鷹のよこなる北平乃星の

曇あまの清法師の花を同くあり
後花堂の是かき其壘乳根
をまぬある子安の場をさゆきを
た其乃際ゆく助の道 花や
花もあく是らうの車宿り
馬留め花より花車はらぬ
とり花がらまら花乃ち踏清
水乃ゆる序まへ念誦して母
祈撫を申さるる

同

花五出く等花を花やあらぬ
花の祇園林下げ京南とりま
花の大地擁護の藤震然花
現乃ちりまら花を同く

はれ箱の山乃りも紅葉のあを
かき下す秋又花のまの清水
のたをれぬ頼りききもちり
花盛

遊行柳

五色はみえ 龍像を弄き
水は金糸のまゆさび打木
れ柳息は揚柳観音とあらわれ
今も絶えぬ心とめり利生あら
たある安をさふ多地也出きバ
都表花威大宮人の清遊も
靴の度れ面四本乃木陰枝
空くききようんある皆れ音

柳様とこきませて錦をかざる
諸人の花やうあやらんは深徳く
風の白ひより手飼入序の引
徳もあがき思ふなられ城のぞ
柏木は及びあきの意路そりし
や、是も老なる柳文の狩衣を
さきりも風おきま思ふことの
よわきそりや老木の柳氣が
あがしてよわく思ふまふそ
夢人を現とみるぞはくれき

同

柳乃曲も秋舞の菩薩此舞乃
襟をみくもよふ人の法をうを
よふ新舞の舞も想は迄ありと

心踏乃をみづの 志をぬき
 草花柳の 後にはんたか
 つまの身もあき ねまの曲よ
 柳條をわね 柳のあをき
 花の葉もなま 花の葉もなま
 木の根もすくなく 木の根もすくなく
 かりの風やいともなま かりの風やいともなま
 なまもあつく ふわくと なるか
 れの柳をねる床の草花柳の
 ひとあゝの葉りも他生の縁かた
 の法西の秋乃風うちねひ露を
 木の葉もぬき 木の葉もぬき
 かりぐく かりぐく かりぐく
 かりぐく かりぐく かりぐく

藤戸

心踏乃をみづの 志をぬき
 草花柳の 後にはんたか
 つまの身もあき ねまの曲よ
 柳條をわね 柳のあをき
 花の葉もなま 花の葉もなま
 木の根もすくなく 木の根もすくなく
 かりの風やいともなま かりの風やいともなま
 なまもあつく ふわくと なるか
 れの柳をねる床の草花柳の
 ひとあゝの葉りも他生の縁かた
 の法西の秋乃風うちねひ露を
 木の葉もぬき 木の葉もぬき
 かりぐく かりぐく かりぐく
 かりぐく かりぐく かりぐく

からしくはちあるかゞくはあく
 まれ物あらん備はめくらあ杖をう
 一あは似きる一かゝるある身
 くせとて服あをくを言
 びごとゆいれたりませ目こ
 不離きれごとくも夏乃れもい
 一言乃ちちあ物と必おれは
 雪よ刃ぬ花のあむる夢れを
 ちよ儲まる浦ああら破よす
 後もまことゆるゆ夕極もあや後
 だましがまこれも平家あり物
 へめとくあわぐらとせ中き
 へ

杜若

夢あま共世平のこ處の栄えたひ

ちやくろろあ理りの誠ありき
 けゆくはをそむとて東の方
 行雲の思きやをりの海づら
 をみよとてまきとて方乃
 きは浦山くも夏ぬ浪くれ
 ち部めゆき信濃成勢あさ
 あれやぐの煙乃たれあ
 志れの成澤河の織またつ
 を遊人のつやわとがぬと
 ちひ程るくの核衣三行
 一あは愛うあはる八橋乃
 よ自は杜若たれ堂乃ゆり
 へあまあまと名百う物
 だまよ此物得其志おれ
 へ

あがらぬ。取書き此ハ橋や之河の水れ
 座ひかく。笑し人々のかきくよ
 心をうへ志あそかへく。人まら女物や
 玉簾の光りも。れきてとる。雲の雲
 此はさぬ。ぬべくの。秋風を。思ふ。あられ
 流生海度。れ種。うと。の。や。や。あ
 人。の。働。き。の。ゆ。の。ぬ。多。月。れ。ま。り。春
 き。月。や。あ。ら。ぬ。や。昔。れ。春。あ。ら。我
 牙。ひ。つ。つ。の。の。牙。り。て。本。巻。の
 如。れ。牙。を。わ。き。陰。陽。れ。神。と。い。わ。れ
 も。の。業。平。此。の。ぞ。う。し。か。根。子。申
 物。語。疑。を。終。ふ。か。操。人。邊。で。き。ぬ
 の。唐。衣。ま。つ。つ。や。舞。を。う。あ。つ。ら。ん

同

齋ひうつる。あやめ。れ。う。ら。の。色。あ
 つま。ひ。た。り。や。似。たり。杜。の。花。あ。や
 め。こ。ず。あ。ま。あ。く。の。幾。坪。乃。唐。衣。衣
 袖。白。妙。の。う。れ。花。の。香。の。あ。ま。あ。ら
 く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く
 さ。の。杜。の。の。花。も。惜。り。の。心。用。を
 と。る。あ。や。今。社。草。木。國。を。や。い
 園。も。草。木。國。を。悉。皆。成。佛。の。由
 法。と。を。し。社。笑。ま。き。れ

二人舞

去程は。第。く。は。道。を。ひ。き。の。糸。と
 成。て。山。も。わ。る。入。山。は。ま。ま。ま。の
 み。よ。い。草。乃。花。は。宿。か。ま。ま。も
 の。ど。か。あ。ら。ら。る。あ。ら。る。あ。ら。る。あ。ら。る

と花もちりぬるまじしは第一のくまの
 あらうあるは母を又山をわち
 てゆくはしづかき清き花の天を大友
 の皇子はおうたれは彼はまき迷ひ
 宮のこぼれを頼たなまひをうら
 本はまの神の足やまの西はの流
 我こそちりぬるを落ても浪ぬかへる
 ありはあてもみずのたのそ
 本陰乃花の香もたまらぬ真
 山乃花はさわがき春の末乃朝
 ちればろきで程あひびきのやま
 ちを遠ひゆく有るは唐出乃
 ちりくの花は身を捨るは遊子月
 ゆきそと身のうへはちりぬるの

花をみてはあはれく惜むが年
 まのあまきつらあらでわがま
 みよの山月はちる花を遊手
 けきかたあはれをのそんぞ野の
 奥深くもたぐは路哉

安達奈

柳うも五條ありりまはみ顔乃宿
 を尋しき日敷乃志の冠き
 うれぬあまきまの人からん
 ちあまはかちりか
 と社き新
 候比の
 山は秋乃
 をやゆぬらん

乃長き命のつまあらと
き命のつまあらを思ひあり
浦島を多と乃て御座あらなく

賀夜

名門やあらんおのまよきれ
くも月もあられと尋ねて
も偶も同じ江は清らぬ心
竹鏡ひ乃ちまき年の夫乃早く
びる光陰をいも返らぬま
との水清きあまのきと絶えぬ
手向成り

同

水もあきみり大井行
れ紅紫の雨さる鬼のう
た戸絶續ある波も名もな
免清能川に水くまへ高根
深をともぬるまき 朔日
てぬまよくまぬ音羽に能
か引まてか頭ら乃雪の
戴く桶も死乃とを死も
おららまれくまも同じ
この日平高の懸うとら
ゆかあがら湯をあくぞ
の神乃あまうよ神乃

くどか岩根松がねあき
流きあらまれば音あ
川に水もあきみり大井
れ紅紫の雨さる鬼のう
た戸絶續ある波も名も
免清能川に水くまへ高
深をともぬるまき 朔日
てぬまよくまぬ音羽に
か引まてか頭ら乃雪の
戴く桶も死乃とを死も
おららまれくまも同じ
この日平高の懸うとら
ゆかあがら湯をあくぞ
の神乃あまうよ神乃

まうらう

同

巖風雨隨時のえうらの雲井く
お雷れ雲きりとうぐらひ
稲素れいあざの露も
なまあいつちれ
ありくる思音のほろく
ほろく
るんぬの敷の射も至まらぶ五穀成
能く國を志の
此神徳に威光を
して御祇乃神の森
去くしらすを
きりをおいつちれ神もあはらふ

よぢとぐら神も天路よぢのほつ
く産をよあがらをとたまひ

後寛

香からよらも葉く露水乃く
心の感も志ら縮のぬわくほ
山路の菊れ露のまよ秋も
さぶるやちまを歌の板も
遠ぞまよと夏たをて又秋れ
そのまよとも草本れ色ぞ志
らにぬや志意の昔や思ひて
へ行よもても
唐寺法成寺の光見柳のま
秋あやねらつる本乃葉の

酒の谷水の傍にも又磯の水邊
の磯あり物を物とす時もの今社
限り成され

松風

乃志が海 賤が塩本ををこびり
めあこぎが浦は 塩一割いさ
海乃がさうの浦二度世も出さ
木の村益うまを日塩路を遠く
あまのかがのうれあまの海
あるまの松をよ月さうさわれ
何のや あまの塩をうき
ぞい人も 彼もつきのう
しる塩をぬきても され月社権

よあま 月あり月入るや
一や見も月あり 月入るや
ぎはがのうら塩乃するの車は月
をりきり 共思るぬ塩路
あや

同

心程氣よあれ衣のむれ日暮から
やゆいしでれ社のあまも後れ上
と衣は飾りうき分あり
しるを思いつれをあつら
の中初言又しをめあまも後れ浦
都へよりの路 此程の形かんと
て成空をけり 藤衣を掛し置

夕べも月をみよ度らやまの
 思ふ事なきはよ結ぶおれさまも
 慈られべこそあぢきまおれさま
 今もあぢおれさまわはるる際
 もおれさまも思ふやれ思ふ
 情深きれ 情は思ひておれ
 かり夜かきそぞ頼り同じ世
 強ういあらばこそ忘れぬも
 前と捨つても置きぬれば面
 小笠増り起すわぞ松を
 より夢の責られぬむら
 少かおれさまおれさま

同

夕べも月をみよ度らやまの
 思ふ事なきはよ結ぶおれさまも

夕べも月をみよ度らやまの
 思ふ事なきはよ結ぶおれさまも
 慈られべこそあぢきまおれさま
 今もあぢおれさまわはるる際
 もおれさまも思ふやれ思ふ
 情深きれ 情は思ひておれ
 かり夜かきそぞ頼り同じ世
 強ういあらばこそ忘れぬも
 前と捨つても置きぬれば面
 小笠増り起すわぞ松を
 より夢の責られぬむら
 少かおれさまおれさま

西行様

多入わさば柳様をこきませて
 都のまじ錦のちやらんたす奉
 の様を植れきうのいろを可乃ぬ
 まるゆる奉奉れ花のうり雲路
 やまののちらん思比命堂を
 れぞうり四五天の栄花も是は
 いまのまゆのまき人あ黒谷下
 何處しう通昭像を乃引き
 世をよび花の山乃乃
 まの花の色を思ひあま
 一まご思ひ志られあま
 上清水寺乃地をれ松乃
 乃音羽山乃乃乃乃乃乃

ねづる能津あえまごも
 大井の井をまきおかか
 西行

西行

大慈大悲のこわりなき
 ひるをれどおのわさるひつ
 れこつらびをそをぬの影を
 だぬまきりしあまごつ
 頼らぬまきのほたをそ頼
 頼らぬまきの親音れ喜
 初敷たまき横川の像
 きられつ小野まもあひ新
 してものきりも尊の
 くり又たぬびえやよ
 かまののまのあられ

日と此をまたあてたりは常
らきんこころしは思ひ乃まは
心されて覺悟の深處に
まじりかき思ひのたつよふ
うねるの海に横たふ枝の
しやあつた枝の嵐そやのこ
らん

長服

清思のこころ織女がくたま
あふふ格人の言乃指雲妙
舞も教向あつたるあそす
まはららたさうあやを織
く我君はけきそのあふ
かた二人の織姫雲河あやの

よりくまをあらあやのや
くろくまを物にあつた作
そめでたをれ

八時

あまぐくく浦のなるが
みるたつをば見せよあ
はぬらあらん格人れ古
とあつたあつたや我ら
やがくく

同

あまぐくく浦のなるが
みるたつをば見せよあ
はぬらあらん格人れ古
とあつたあつたや我ら
やがくく

族登殿のや先は急つけ馬より志
もまどうとむつまぶ。おまの菊も
うまきをれん。昔は表とむねしき
かみちゆへ陸の陣あひひしはく
の後の周の毛をてつるの俊松
飛計は音あひくくごうあきもる

同

しきの志ゆらら敵のたぎ。あふ能
急守救援す。や。意物と。や。午か
この志が。女。思。う。あ。だ。ん。多。浦
の。其。よ。軍。今。あ。も。く。岡
後。あ。つ。ふ。ま。き。よ。の。海。山。同。震
動。して。舟。より。の。周。の。毛。陸。ま。あ。は
た。く。月。ま。き。ら。せ。へ。一。銀。乃。光。り

引。し。ほ。ま。ら。ふ。の。星。乃
秋。水。や。ら。ら。く。ゆ。く。も。ま。る。雲。の
あ。ろ。ち。あ。ひ。あ。ち。ろ。船。軍
の。か。き。ひ。ろ。う。た。ま。づ。む。と。せ。一。程。よ
な。ま。の。お。乃。後。より。明。て。か。き。ま。く
み。く。お。む。き。さ。る。か。も。め。さ。の。毛
と。陣。え。い。浦。風。あ。り。も。り。高。ま
つ。の。浦。だ。あり。たり。あ。ら。ね。の。あ
さ。風。と。う。な。り。ま。ら。お

音城

音城山の名橋なる。あれど。目電
の。ち。も。い。ち。さ。る。き。林。林。の。かん。く
う。き。い。ぬ。ぞ。せ。の。神。安。は。ま。う。ア
わ。が。あ。芳。野。の。山。ふ。ら。か。き。を。通

か思持のた後此魚の思あれや
神楽舞り下めて大和舞い出や
これぞん

同

音... 後の原流懸く此舞
あ後の香文此も向ひよ又えさを
卯志坊く雪志乃く此舞も白
妙の舞... 妙の舞... 妙の舞...
つらき乃神れ舞... 妙の舞...
おそもゆか... 妙の舞...
あさは... 妙の舞...
中... 妙の舞...
城... 妙の舞...
と... 妙の舞...

海士

其のまきんちらさう入るあぞ
終つ約束しびこつれまきんを
按き... 彼海鹿はなつれを
めひ... は雲の浪煙の浪をまの
ぎろ... がまきんく...
窟下... 窟下...
らぬ海鹿... 窟下...
も取えん... 窟下...
龍宮... 窟下...
の高き... 窟下...
とこめ... 窟下...
... 窟下...
... 窟下...
... 窟下...

恩愛のち郷のかつぎき
 乃あり乃あり我子あり
 ん父大座もれしんら
 も此まよわれ果あん
 休くみくたり志ぎ又思
 とあまを南無や志使寺
 薩摩の力をあかせてた
 大悲の利縁を類よあて
 まるびつれれ飛石はむ
 きる其際よ寶珠をぬま
 ばぎんとすきん衆護非
 無くなくみし事あれ持
 きとみあほし能乃きこ
 り玉を押らぬ縁を捨て

たるなる龍宮のあらひ
 いぬあまよりまらう
 約束乃繩をうごむ
 引あをうりうり玉の
 人の海上よりうひり

鞍馬天狗

花のさきんらひ山里の
 使ちあり馬は鞍くら
 ずす操年抄枝折を
 ぬ迷の味つづく木
 いざし花をまあん

同

松花のほとひてかく
 中ある表後雲はち

ついでに花をすてた乳もやみとて
花はあつり鐘を鳴らしてより
奥の鞍馬の山道の花ぞあつた
此方へ入を終りや

同

上野武界はほまれ道のく
平藤播磨家も死に彼家の家
上の清和天皇は後継とてあら
く時帝をかんとすまはれ
平家と西海はれつとて
備後の原雲は花行れ自在を
てかまきとたひらぎを會
ん御家と守るべし是定ありや
聲もよとまなまきとて若旅

かり終へたてはあつた西海四海
の合戦よりた最方を離す
矢れ力をうへ身おどり頼め
めしあふかきとらき頼め
めしあふかきとらき頼め
めしあふかきとらき頼め

咸陽宮

花のまきまきよくの花
柳花苑柳花苑の鳥の曲
つぐれた松花井はわらわ
金もちちまはれり
花露のうへつきたまは
人あふもあつた

アヤラシクもわらへ

同

神代は神代は神の御あはれなりとも
ち榮 神代あはれ神の御あはれ 龍男
山内の時政降はる 引くくの
鈴井降 引くつや行あはれ 引く
志ら卯 神代松かぎあはれ 引く
あみぢ榮敷もまつ 神代あはれ
あみまひお入るも 夜備上 降
くさるも 引く 神代松かぎあはれ
まりて 神代あはれ 引く

陽田川

我もあはれ 引く 神代松かぎあはれ
あみまひお入るも 夜備上 降
くさるも 引く 神代松かぎあはれ
まりて 神代あはれ 引く

知んた く 引く 神代松かぎあはれ
あみまひお入るも 夜備上 降
くさるも 引く 神代松かぎあはれ
まりて 神代あはれ 引く

雲林院

二月やまの膏あれど月か入積らる
あはれ 引く 神代松かぎあはれ
まりて 神代あはれ 引く

思の志らば速に行らばまゝ
 紅茶がまよひの袴踏まぎ後
 出やまの男のびくまゆひ
 藤がうゑ志をまらうをう
 信濃路やそのる志をさ
 此袴夜の袂を冠此
 づき愁ひ出るや二月乃
 所そまや入くおぼろ
 つかのまゐれたるあはれ袖
 板ひもろをとり志をま
 くらたぐりくを速に行

春日籠神

大蛇王のつ乃冠をかき
 向春日の月三笠の雲のほ

己婚乃野守もいでんや
 の誕出鶴幸此流法
 恵上人徳金唐古
 天のまよは
 舞あまや
 うあらしのやま
 ま花若行へ龍神の
 浪をながくもく
 此大地とあつた
 是晴るて池水
 入て

源氏供養

柳桐壺れ舞の煙ま
 のをよるアリ

紫の終は光樹の花ちりぬ
 此の命を親とて思ふは
 久未摘花の夢は空をみだれ
 質の秋は花散るもよ
 く儼まよあひあから
 少して佳をばおふべ
 里よまももも愛ふ歌
 わりまぬがれがさき
 赤べららの雲流浪の
 浦をゆく四音を聞け
 よこをゆくつまでも
 心遠きの宿あたら
 ねまべし松尾は次

うき雲の影さき事
 の風きぎを走ぐ
 ぞう飯止見蓮聖
 心をかきてま
 もこよゆら女梅
 つる秋心藤のう
 其玉昔かき志
 ねぞいあな
 本あるもさき
 内よこめく
 よたふべし
 あふべし
 牙の束逆をね
 方結院如来狂言

くしては居りし

同

瑞門少く教を修りつ其の
ちを甘泉殿のかぶよりし神を
畫圖は立りひて月言教を修ひ
きりしきせあうく思ひま
しきせ物にひかす事あまを
うく教を修りしと申す
子のいせれくまもんが
そらうく修りし
是れ思ひに修りしわにの
好ありし人同し修りしと申す
後にはとら修りしと申す
君すまうしと申す

志らく愛よまねくべしとて
懐れ中はまき及魂書をたき
後かき人志のまき内も
月秋ありしと申す
あまのまきかきと申す
一の思ひまきと申す
の年よりたまらで修りし
づらうく修りしと申す
てか又修りしと申す
乃あまのまきと申す
甘泉殿をまきと申す
をうちららひしと申す
権ひらりしと申す

富士志教

清し思ハハ腹たちやツクヤギも
 後より入て言葉もみづれぬや
 が出たまゝもみきてたすいあのうちら
 三やもどかばとふ教うあたるや
 樂持するだちをば銀と定あやぐ真
 妻乃燈をち敷れ烽火の天よあが
 れば雲乃は人城のやぐれろ一境
 ばもまれてまう野の橋西方を
 可敷うもみて花衣をひ手もひ
 くもえ給人の舞あればち敷乃や
 くの本よりゆきゆる影のまもし
 からびたぐいあつらうをウ突
 やあ人れ悪心煩悩のや暗て五
 琴樂とうちたき 徳のち敷

ふうちやあは君乃あのちふ伏
 樂こうたうよあまのちあ高
 侍をなも榮えて安穩は恭
 平樂をうらうらあはまはまぐよ
 かのまきぬく山乃端をあうあ
 やまてまねまうへまひ乃手の
 づれや今ころあ思ふかまきぬ
 うちたきうらわて絲をやあら
 ん神よ今まわあ胸のまあ富士
 恨をまらばははこらうあかりを
 れ別途あやんまぐ眼たてあ
 らもと俗人乃築鳥うごああま
 控て執心あなま筆乃あれ髪あ
 思ふあ忘れしあまうあ太敷

こころうき人の影ありきれとぞん
舞てぞ舞まざる跡を見直してぞう
つらさを

皇帝

よきとあはれやとあはれやとあはれやと
地をきくつらむ時もあるまじ

梅川

あやや年をへて初鏡と暇を敷
かふるや若雲ととらふ心
ぬきば後あくるたよ暇を思ふ
あつた方えぬくも秋も草を
帯のそと又ぞうたれまはれは情
よりあはれぬる花あはれは落て
も水の表とわいたを白波の花まは

あはれや年をへて初鏡と暇を敷
かふるや若雲ととらふ心
ぬきば後あくるたよ暇を思ふ
あつた方えぬくも秋も草を
帯のそと又ぞうたれまはれは情
よりあはれぬる花あはれは落て
も水の表とわいたを白波の花まは
あはれや年をへて初鏡と暇を敷
かふるや若雲ととらふ心
ぬきば後あくるたよ暇を思ふ
あつた方えぬくも秋も草を
帯のそと又ぞうたれまはれは情
よりあはれぬる花あはれは落て
も水の表とわいたを白波の花まは

山崎の越路は通子花の陰に
 打もみ肩をかき月夜はまゆと出里
 遠送るさうりもあり又或時ハ織
 姫此のいほさうたつるまごよ今
 枝の賞多きうり紡績此宿よるを
 蠶人を助るわざの志乃乃目
 まよぬ鬼もやんれん免を
 蝶の唐衣拂ぬ袖はかくおの
 衣を月よづもれうちあはむ
 人のきこはるも祭祭おまじれ
 夢の志ぎうつるぬぬらうわ
 れや都は學まて世がうりも
 衣を終へし思のち程も妄執
 とうち捨又何ぞもし足鬼

の山崎が山崎のきこぞきき
 同

山崎の越路は通子花の陰に
 打もみ肩をかき月夜はまゆと出里
 遠送るさうりもあり又或時ハ織
 姫此のいほさうたつるまごよ今
 枝の賞多きうり紡績此宿よるを
 蠶人を助るわざの志乃乃目
 まよぬ鬼もやんれん免を
 蝶の唐衣拂ぬ袖はかくおの
 衣を月よづもれうちあはむ
 人のきこはるも祭祭おまじれ
 夢の志ぎうつるぬぬらうわ
 れや都は學まて世がうりも
 衣を終へし思のち程も妄執
 とうち捨又何ぞもし足鬼

善界

龍王の徳天の板れきぬくくこら吹
 凡の東をされば山王権現南
 よろこひ西は松尾の野や賀
 の山凡神をせ集まらへを
 まはれつぎさ平地はちあか
 らそつゆゆの八嶋乃浪の
 おとろそろがまのそびま
 ままそそか程はあふ佛力
 神が今より後の集まらと
 いふまきづらひの虚をよ
 づらひの虚空よのこら
 踏よ入よまを

芭蕉

水よりうき樓臺をまづ月をうる
 あり陽よむ久五花木はま
 よあふりやまきある其こわ
 りも横ののあめ乃前はね
 ろやあまこ夏たを秋なる
 音信を感れをきなら先う
 ぎらうよがる秋とあらん
 牙の寺の好れ草君ぶと
 どつあへん花き凡のまよ
 芭蕉茶れもろくも落多
 の牙のねき所あま虫の音
 よもぎがそそし乃心の秋
 あどか替らん寺たや思
 めあきよそ芭蕉茶入夢の中

よ。小鹿はかくねのやぶあからぬき
 あぬ人ひさるるる乃おまあき
 と。自まきり 僕ひぬぬる林の
 風乃音 響り 志ぎきお藤原
 雲乃小物なるまきり袖志き
 ちやええん

同

あまのつと女乃羽
 夜あれや 是もむかぬるさう
 ぞをうらみ 是れはたもも色
 煮乃あまぎの肌をうくく物
 こまきう葉乃庭をあさぢぬ
 こなべーかろや。ねもかぎうつろふ
 雲のまよ山ねらー松乃うを例

らひくも花もみ草もちりく
 よ。花もちりくはもねぢよあれを登
 煎のやもきて。砂りきり

百萬

あらわろる念はあの柏子やゆらら
 あんぞととをゆらり 南を
 須陀佛 南をゆら陀佛 南
 せあそふ仏 南をゆら陀佛
 頼む人きあ後あ月あれや雲
 まきり西ゆく ねもかぎ
 まよだも 誰なる頼まぢるゆら
 ぼくさるべきも思ふやまきり物ねみ
 づれんか意草のちりら車はわ
 ろる後 ちりもあま ねらるる

もひきやえいしちえいさ
どよ軽きみ乃力頼めや頼め菊
阿弥陀仏

同

もやきぎのたやこれ道よま
とありてジク狩りの園を晴や
らぬ月あうも曇り
うまあふま尚三界れ首を
名半の車れまこまいつくを
りてひき後えいさりえいた
ひきや此車物んあり
くおま百萬が染め本よ
りあがき急後を荆棘れこ
く龍くとおりのなる名ほし

引がき又眉根くらま龍墨
うつし心う捕鳥引うれと人かう
ひもせぞ思ぬ人を尋ぬま親
おれ娶りあまき衣肩を結んでま
うましぎ軒を結んで肩より
けむしうまれおまごまの
ぐれ心あがら南無釋迦阿彌佛
と信心をいふも我もあまんあ
あり

同

春良城乃これてが
まかくも他人のあまき跡の涙を
身袖れまがらうも霞あまき思ひま
ある年あまき流る月の歌を

西乃大寺の柗陰より子やく
 白雲のたき別まきくらぶちを
 花びとからあらぬ思
 紫雲の山にきもあをさし
 奈良れ都をまけて海に三笠山
 原の川をもち渡りてお城は井
 手乃里野水のあがりくち敷う
 つも面敷清きき流ありき
 かくて月日を送る身乃羊のあゆ
 こひまの物足はほきてはねは
 け西のゆきつる後俄の寺は事り
 つ四方れ乳衣を体きくは花のう
 き木れ亀山やをよあがら大井は
 城は像世のさがあれや威を行山

檜鼠のかぎ松乃尾小倉の里れ
 霞をそつを小忌の袖かきう
 多き花衣貴賤群集する此寺
 乃法うつるまきかきよりもこれよ
 ても此寺う有能きか下を
 ねくもかお身よ中ぬるれあき
 二信れ中間我らごときれ速ひあ
 る道あきらめんあるとて見首
 新磨がつくりて推梅檀乃る密
 やがそ神力を現して天然震且
 我胡三國は傳りる者能くも此寺
 子現れ給へる安住の成徳とす
 元乃母摩那夫人の孝養乃あ
 為あきバハハ母をうあひ給ふ

道ぞうりやん人向の身うてあ
どか母をすまぬと身を恨み身
をかはち感謝してぞ祈とある親
子ありやうの袖あれや百萬が舞を
見給へ

秋并慶

後風も静と留め給ふかしく波を
あうゆやうどの神懸て替らんと契
り。まあしりて惜き命の君う二
慶逢人とぞ思ふ何れも

同

秋並の静と留め給ふかしく波を
あうゆやうどの神懸て替らんと契
り。まあしりて惜き命の君う二
慶逢人とぞ思ふ何れも

ま六秋の静と留め給ふかしく波を
あうゆやうどの神懸て替らんと契
り。まあしりて惜き命の君う二
慶逢人とぞ思ふ何れも

同

美樹は是の植武天白五九代乃は此平の
名威出雲あり。其意ありやうも義経
思ふもはらぬ浦波のしさを知らず身

此是ぬめり秋まほろあざら
 ありりり。然吊ひくたび終へ
 く おら閣僚こひりや
 娘は悪鬼の身を責むるかく
 会力の道もあうき銀乃山の
 へは寄きまの交えり城
 通し 無事の骨とくだく
 もいかりたうりやつら
 枝のたわもまじり 涙の
 の果るや あからま
 一時をくねぬ 女身死つ
 ちきうて 花の
 てたび終へ を

自然居士

黄帝の片下よ 貨秋といへ
 楽あり 貨秋庭上
 のね 秋の
 末 秋の
 茶水 茶
 出 茶
 塔 茶
 秋霧 茶
 思 茶
 黄帝 茶
 鳥 茶

く亡ぼり、清代を治め給ふ事。今
萬々半歳と云、銀さへ形つを
ん乃字をまみよせり。やと蛇たり
撥又天子乃由頼をす。難ううむと
名付たきまつり。熱舟を一城と云
り。此由字よりうり。まきり。又
君乃清代舟を龍魂。龍首と云
も。此由字よりおこり。

同

君も又其ごころ。あいられらふ
百人の志ゆき。あいら乃行はる。扇
ほの。杉のとり。念を是を。可
の志賀の浦。あれ。は。彼。や。く
楚が。辛。侍。の。杖。の上。祭。を。あ。ら。ま。く
た。ま。も。て。た。び。給。

とき。た。乃。ま。ね。を。志。ゆ。す。ま。れ
は。あ。ら。より。程。并。を。も。す。る。物。た。め
た。ま。も。て。た。び。給。

三輪

あ。き。だ。此。人。お。め。か。れ。た。ひ。る。え
は。有。よ。の。む。つ。も。あ。身。い。ら。れ。る
故。ま。より。か。く。年。月。を。送。り。の
書。を。ぶ。行。と。う。べ。ま。の。よ。る。あ。ら。て
通。ひ。給。た。ぬ。あ。い。と。ぬ。ま。ん。ま。き
り。あ。り。同。く。ぬ。と。う。と。あ。り。更
り。あ。り。を。こ。む。べ。し。有。い。ふ
彼。人。へ。い。や。う。の。も。あ。り。和
し。乃。ま。り。て。金。可。也。志。ら。れ
あ。ん。と。より。ぬ。あ。通。り。ま。り。想。も

かなへひがたりありし悪は諸まば
 こまひがたりありし悪は諸まば
 神はかゝるまのあしあはなる前を
 志らんそとてままきい針をう
 を鑑るこれとちつきて跡を
 ひうへてあさひやくの青柳
 のあがぐままきい玉の枝
 がかまはかまのあぐりなり行
 移よ。此山本乃神垣や枝の下
 枝よとあがりしりてあさもあさ
 しや契りし人の第あ其まの三
 わぎ物りしりて三輪は枝のこ
 しよを語よつきて飛や

安宅

ありあたまきの水鼓目あてるた鏡

ぐとうあさつとくやぐくなくや
 ぐうが弓はあゆんあ御守の人
 とあたらちらぞもしてあをたか
 死肩よりちかき。虎乃尾をささ
 蛇の口をのあさなる心りして陸奥
 臥ぞ。とりをた

東水

三河の九重の東は乃あ地まは庄城
 の鬼門を身りつ。悪魔をからふを
 水の糸上あ山陰のかま河やま
 白川の浪凡もいふたまき御音を幸
 楽の縁をあふともや庭あ地水
 をたへる鳥の宿は地中は樹
 僧のまはく月下のい出入跡を

花がでとつらねをひそをほろこ
 めく有換のまよく花の敷あり
 見佛回沙のますく順送の縁
 ちいやまは日夜輝暮は輝ら
 び九夏三伏のまつたきて秋きま
 かりとねとろく洞底の枝の風
 聲乃あきももよありて上求ま
 捲のきをみせ他ありまうつる月敷
 下化流生地相をえうり東は度
 陽は時節をきぎやとあられたを

輝丸

多花養都をまき出くうらまね
 ちあくるかき下や中を白あを
 うちわたり栗田口まもましく

む今誰をう松坂や開乃とあを
 思ひまははあや音羽山乃ぬ
 珠の都や松野ま虫まきり
 ぐすの馬やゆい蔭乃山林の里
 人もまきあまは女あれど心も清
 能はと知し 運坂の開の清
 水は敷みきてとやひく見まきり
 月花釣のあゆもをづくか氷もえ
 一と井のかぎまれば我あがら清
 ずや髪やねとろを戴まは儼も
 ぶざれらうそて突内をえ乃敷
 うつる氷をかみそゆは浪乃う
 あり我姿や

同

身は遠かりやう途もなほ殊の更よ
 盡くすまじく 蟬丸 一樹乃
 蔭の宿りよそよまじだよ有まじ
 て交せうしる宮の侍をさし
 を思ひやせ給へ 契りありや枝か
 からのゆくき 戀むる年あるは留まを
 内さうとゆふ雲のまやせらひく
 泣きたり かくや 蘭路のなうら
 がれぬうをむら 我らうか
 あくせやく 別路よあまはあり
 の 開乃 杖村すきゆも 人様
 となくあるまよ ちち乃 将
 別路乃 杖村すきゆも 人様
 何をほへしんかよきれはる 杖村

送る人置てあぐく 藤花
 一トトニニ
 一トトニニ

狸々

上老やぬを 薬はあを毛菊水
 年うらひ出く友あおぞう 邪
 きの此や 藤花うらうら

同

身は遠かりやう途もなほ殊の更よ
 盡くすまじく 蟬丸 一樹乃
 蔭の宿りよそよまじだよ有まじ
 て交せうしる宮の侍をさし
 を思ひやせ給へ 契りありや枝か
 からのゆくき 戀むる年あるは留まを
 内さうとゆふ雲のまやせらひく
 泣きたり かくや 蘭路のなうら
 がれぬうをむら 我らうか
 あくせやく 別路よあまはあり
 の 開乃 杖村すきゆも 人様
 となくあるまよ ちち乃 将
 別路乃 杖村すきゆも 人様
 何をほへしんかよきれはる 杖村

盛久

是や流るるも歸るもわかれもあはれ
 雲もたぬえ逢坂の關宗も今の我
 をももともあはれ長橋うち渡
 り。まがれ歌を鏡山出のこ年へ
 こあはれ流るる老曾乃森をささや
 せむらうり。あつるの浦乃の境の道
 をぶ波はかききれく。あはれを野へ
 あつるがさつる八橋や高所はく
 志願ん坂り。まがれを渡あつ橋を打
 渡り。橋家かくきて見んと思ひま
 ち命ありきまあはれ中山の是か
 よ。昔もあつるの大井け。さゆく
 浪もろるる山。熱も開は清らんが

三條は入海田子乃浦お出でたれ
 へまはらあはれもあはれ富吉のね指根
 月行や星月あはれや金徳は流はき
 けり

同

酒宴あつたはれ雲の響く。曇る
 日影のどかして。君をねふ千秋乃つ
 るが園の松は茶のちり。あはれ
 翠林はらうら。長橋あはれありあ
 り。あはれありとまかり。あはれ
 流るる盛久が心れ中ぞゆ。き

善知鳥

母親ををみて血れ涙をさく。まら

ぬれとすかぶのやまをからみ
 愛かこれ便りをおめて隠き
 かくれた方もあらばまの
 血乃涙もあそくれお井ま
 わるあなまぢのきこれか
 のやまやまもあそおま
 ことみえそまも
 化鳥あり羅人を遠ま
 のやまをあらそまを
 ねろつめまもま
 むらまらまら
 極火の煙ま
 ちま
 ぞんま

りのむく
 とあり
 くれが
 わら
 敷
 かく
 へ
 ち

小塩

乃れ
 陸奥
 せん
 せん

露と白きしは幾世續りて御成
らん花もつぎなく葉のあも泉
あれがあざくらやまはら
ふ菊水のあはまもかくるら
んと心も晴やうにびるる
有月乃まはしあきたれ
栄花も栄耀をそふ此ら
あふま

同

月人男の華あれども
かまよつるるにびれを
おきらきく
畫はありひるさねは月

まゝの花さけ
の茶も文と
おもひやうく
おまきく
そは日な花さけ
まやあきかくて
五十の栄花を
の中あれは首きえ
く。有つる邯鄲乃花の
夢も花にきり

殺せる

花の野の原は石のかく
杯一跡までも執心を
て又立入るる物冷は

きん乃くくろみ松桂の枝よあまつ
き柳蘭菊の花よかくれ御洗夏
時志も物すこま秋のゆをさうあ

同

多きもは幣を拵せつゝを
くまきののりくゝを續て其様を
拵めててづく幣泉をわく
ぶき入る雲井を辨り海山を越く
此路よりくればむ
あまの繪巻をあらまに
生れ者や夏はさの物さうを
て撃干きあはれな火を
煮くそ百眼火を射る

夏大退物の始とや
東きく一牧万球本
めて草をこく
とまのふるよ
退りまの
下は縣を
づら
ほ
り
と
及
は
結
ま

野宮

車は前なるはたしむるよりて人く
 あらえよさうりつまつひとたまひれ
 ねくよあやられく物見車乃ちら
 手なきよれ程ぞ思の志られきるふ
 しや思の何ぞも靴の羅よ
 もまねし身程うれ車の際
 めぐりきまらぬさう鞍をさう
 終りく昔も思の程さうて
 月さかく程さうきりれ程の
 月も昔も思のらん
 そ杜乃さ程さう身は置程を
 表むりの程の程の程の程の
 まさる程の程の程の程の程の

業は前なるはたしむるよりて人く
 あらえよさうりつまつひとたまひれ
 ねくよあやられく物見車乃ちら
 手なきよれ程ぞ思の志られきるふ
 しや思の何ぞも靴の羅よ
 もまねし身程うれ車の際
 めぐりきまらぬさう鞍をさう
 終りく昔も思の程さうて
 月さかく程さうきりれ程の
 月も昔も思のらん
 そ杜乃さ程さう身は置程を
 表むりの程の程の程の程の程の
 まさる程の程の程の程の程の

唐弘

日の上入るる乃價金も何あら
 子程の實よもあら諸程の心なき
 えびも乃國をさつるよか程のま
 有るよと日本へも程なき

たかまの箱家の神も御受へ給ふ

同

松高まの森樂は志まじつしつ
珠朽つる海つらきく成ゆくま
子松くも遊龍松の森乃の袖の
此も遊手やあらん松を引ま
て解まはほとひまつまて松ま
松びつ内そなまらりしりて
るまきくた

弓八幡

松高まの枝平冷らある松乃の嶺く
曇らぬ所はまらるる松月れら
乃男の松平松やまき松は来
る若高松とらある松はあゆ

松高まの海なり

同

若高まの松は志まじつしつ
あるまはほとひまつまて松ま
松びつ内そなまらりしりて
るまきくた

舟本

仙人のつらき一草をんは新かく
 社あらぬ我を身を捨人の為乃鉢
 木をさすもくもすやさしうらんと
 雪うち拂ひくつれは面自やうた
 せんを冠る木をさすそを冠る
 梅の西の雲封じてまききやを
 ちと木を冠るはささきく梅を
 みるやさきもさきかろくさう人
 ころうきれは里乃をうらむを坊の
 梅さすは情ありとさしうらむ
 今又新よあらぬわらうとさき思
 里さや梅をさすれはまきさるる花
 まさき一途きれは木や花さし
 心をほろりささきさしうらむを扱

のこころびくまも梅梅のくくひ
 梅よあらぬぞうれしき松松さ
 一もさき梅をさすはあはれさう
 てうらむとあれとうあおきしそれ
 うらむの冠吹雪の春来ときあ
 ちて薪とあるは梅梅切ぐて今
 ぞみるまもりは清士れささきやあ
 ちありありとくよりてあつり給
 也

羽衣

早雲の雲のうき波たつと力をなく
 鏡さく人かあるらんまて志ざり
 まさらばあそこのけき銀凡の松
 常盤を拜ぞう波の音あま

朝なまぎよ釣人おほきいお舞く

同

多岐慮がれびきり久々の
月乃燈ら花やちる花
驚もめくあまのきりかや面
白や天あらで寝そあり天
律風雲の通らちあふび女
乃安志きりあうて代松屋の雲
たきを三保さき月清見さ富
去の雲らあまのあまの雲
ひ波も松瓦そ長閑あうら兵有
換り上天地のけを隔てん玉垣
の内外れ神のあまの月
曇らぬ日本やあまのあまのあ

夜まはあまあつたあまの
ぞしあまのあまのあまの
てあまのあまのあまの
雲の外まあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
りてあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

同

名を月あまのあまのあまの
らにらあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

どの終ふ去はほどし時うのて
 天乃明衣浦凡うちれむきたが
 三保の松原うき鳩が雲のあ
 一きう完富士れ高根はうま
 吹く天津みうらら乃種ふまされ
 へるふりきり

芦刈

あれははるまゝのさまに。あて
 どのめし細解のえらや〜とよせ
 赤るぞや、ぬかきとよあてし津れ
 ち〜子うそ大笑のうち迄まこゆ
 あびまは〜あ〜の〜海士乃
 よびま〜積おさるるちをを切く
 細の目乃前、坊んえたる有根りま津

後をまやんぐ、西自や心あらん
 けり〜人〜や〜の〜難攻
 日〜り〜ま〜た〜ぼ〜母出
 が〜形〜仲の〜磯破み〜野た〜ま〜て
 友〜と〜海士れ〜無あ〜らん〜雨よ
 き〜く〜の〜場もあるあ〜れ〜あ
 も〜ま〜の〜あ〜ら〜ん〜
 彼津のまあきや、外うあし梅
 花がさ、外うあし梅
 若〜を〜月乃、月乃あし神
 天津乙女まきぬ、引れぬま
 是〜ま〜の〜の〜袖
 笠ひぢい、雨のあ〜
 んを波あおら〜ら〜ら〜

教^{シテ}ある^一塔^ノ毎^ノま^ニび^テ果^シ
 て^は多^クなる^もゆ^らか^き電^ノ鳥^ノは^雲
 下^ニ山^ノ野^ノ鷹^ノは^らを^みづ^るれ^のう^ら
 空^ノの^あら^の機^ノ衣^ノ日^ノ平^ノ重^クて^年月^ノ
 乃^レ世^ノある^春は^比け^下谷^ノは^花り^て志^ス
 ぢ^のあ^まは^はは^のの^浦引^りる^れ
 山^ノ風^ノ吹^落て^野ノ^花を^散ら^せ海^ノを^度
 子^ノ舟^ノは^あら^のく^書と^あら^の千^鳥
 此^ノま^の我^ノ袖^もは^はら^のま^の花^ノ散^らせ^る
 の^昔屋^はも^のあ^らの^負た^人は^れ
 そ^のあ^らの^花は^あら^の煙^はも^のら^の電^ノ
 の^抄敷^て思^はれ^るも^の山^ノ里^はも^のら^の
 可^レ住^居ま^のて^はた^人は^あら^のら^の
 下^ノの^果も^のあ^らの^ま

同

美^シく^も浪^ノは^馬を^むら^のあ^きれ^果
 あり^の者^ノ候^也か^のま^のり^のあ^らの^ら
 下^ノの^懸谷^は次^郎真^実途^をも^の進^め
 馬^ノを^り教^ノ盛^も馬^ノ引^をも^の波^ノり^り
 ち^の物^ノ扱^くま^の打^三打^のう^らの^その^こえ^え
 走^ら馬^はも^のび^の組^では^らち^際
 下^ノの^落重^のも^のあ^らの^身
 下^ノの^因果^のあ^らの^あひ^の散^らは^是
 ぞ^のし^のけ^んと^まの^あら^の怨^をも^の恩^を
 下^ノの^下乃^の念^の飲^{して}吊^のり^のま^の終^は
 下^ノの^共の^生る^まの^同下^の蓮^の蓮^生法^は
 下^ノの^仰敵^をも^のあ^らの^と跡^吊ひ^ひ
 下^ノの^くあ^らの^ま

葵上

神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 の浦あり 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 くれ 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 月神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 約 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 て 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 ら 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 地 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 く 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 天 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 子 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 神 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 出 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり

江野為

神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 の浦あり 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 くれ 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 月神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 約 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 て 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 ら 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 地 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 く 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 天 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 子 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 神 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり
 出 神代水波の浦あり 神代水波の浦あり

くはを雲中へあらりて
すうを雲中へあらりて
有がき。教向邪

西王母

花を名へたやさうまじけく
の市あまさ曲水に
の水うたがみきき
袖をくもたおびき
く雲の花鳥を
雲路よりつぎた
とて毎そはひよ
ゆくをそあらんぞ

道のち

吟かたけに於舞の曲

徳のうてし七拍子
とうやまひすけい
まねき。千秋楽
万歳楽を命と
志まき入乃花
木樨樹れこ
乃西風をたぎ
乃とあひさ
にあつたはれ
ぬく桜を百八
悩をかぞは
鏡にまに神楽

無改

青いあらしの息を吹く風は
 落ちて村を乃とくまふ
 折るや折る成けり大徳
 ありくとして村を乃とくまふ
 後を乃とくまふ
 赤くあらん第一牙二乃
 して夢の凡松を乃とくまふ
 木の第三牙四乃
 てまの鶴を乃とくまふ
 中うあく雞を乃とくまふ
 雲の雲かろくを乃とくまふ
 めで標作を乃とくまふ
 けつらねと標あそむを乃とくまふ

どの声も乃とくまふ
 子もむろくを乃とくまふ
 笠山を乃とくまふ
 夜道や乃とくまふ
 や

同

荒るや我を乃とくまふ
 けろくや乃とくまふ
 かにあられむ深夜の月を乃とくまふ
 にはや帝釈修羅乃とくまふ
 をあらして乃とくまふ
 赤く乃とくまふ
 ぬれを乃とくまふ

一車よりぞくそでかく鏡十文字
 一鏡翼飛行者秘傳をゆくまを
 一をえつらうちなまをえて悲らく
 一と東平の雲をくは是迄ありや旅人
 一よらへ後申て花を好み鳥の字
 一まよかかふる夢を鳥の古葉に
 一のあまをよかましくとひくたび
 一風

巴

前
 美かくて神おそき事あがり。みまは藤
 乃大勢あまら巴の女武志あはれま
 乳そら守あし。かたは日志あし。か
 きたとくひくひくもひらるま。い
 て一軍勢やん巴はくもあ

一わが心かきまぬぬくあつん
 一と長刀鬼そはめまきりなる
 一まいたあれだかたあきさり
 一とがや怒きく長刀えあぐれ
 一釣るりけべて西方をそらあき
 一ならひ。あしあつるを求めあき
 一。あしあつるや花の能成花
 一とあつて我ひをまら皆一方に
 一切えられて花をまらうにえさ
 一りるやし。あしあつるをまら

花山

一志あつた若屋の松丸のうら
 一の花盛開くはあきまきあつる
 一あつたの山づく花葉摘乃川の水

清く美く多き月のほめる世に高
 けりありあまもても清きの大井
 川を氷上のまきしきし老僧
 花をそらうましくさるる凡の
 空にみちてかくて庭前乃木をま
 るも神風を吹く人さるる
 雲を咲ぬべし千本の山杉長閑
 きあらけ山風の袋を枝の雪下
 け日も隠れしれ竹乃よあまはま
 くを終ぬべしおのそみよりけ
 山標まをけ雲に打のりて。あ
 陽残る西山やみあはれかまゆき
 はけさく

同

上境
 義利先利物のあまがく
 老乃。都をわけて分後同勢の塵
 ままのりし金胎两部乃を
 ひりあを悪業に生れの苦態
 をなまをけいし又虚空に手
 吹あがくへん急苦海の煩惱を
 まらひ悪魔降依乃青蓮花
 花トよまに光羽を放つる國去を
 てあまを身をあらうひとあら
 けりももせかりて藏玉権現同
 躰具念乃まらるるをみまらるの
 くありあり乃あまのあまを
 ねまたのあまを指よりあまを
 のらあまを金乃事れ終りて

ふ本れ様しく、義ありぬくま
こころ久しくき

巻箱

是にふれ、有れ、
ちま地は、
く雲を、
をうき、
あらか、
あし、
天竺、
さ、
ま、
ひ、
ひ、

ふれ、
あし、
天竺、
さ、
ま、
ひ、
ひ、

同

ふれ、
あし、
天竺、
さ、
ま、
ひ、
ひ、

